

だから、UD



個人部のグランプリ「UDさくらんぼ新聞」

最終回 やさしい心から生まれるUD

自分の身の回りで見つけたUDが新聞になった

ユニバーサルデザイン(UD)への理解を深めてもらうために、県内の小学生の皆さんを対象に昨年行った「UD新聞コンテスト」。身近にある建物や道具、サービスなどをUDの視点で取材し、新聞形式にまとめるというコンテストで、個人、団体の部ともに、個性あふれる作品が多数寄せられました。

個人部の部で、見事グランプリを受賞した庭木 櫻子さん。新聞では、陶芸家の父・健二郎さんが作った器や身近にあるエレベーターなどが、イラストや4コマ漫画を織り交ぜながら、分かりやすく紹介されています。「UDについては何も知らなかったけど、絵が好きで、新聞を作ってみたくてと思い、応募しました」。UDについて調べ始めて、健二郎さんの器もUDであることを初めて知ったという櫻子さん。健二郎さん作のカップとソーサーは、手や指に力をあまり入れなくても持ち上げられるよう、デザインが工夫

されています。「お父さんから『UDは見た目や技術じゃない。やさしい心から生まれるんだよ』という話を聞いて、素晴らしいなあと思いました。やさしい心でみんなを楽しくできるお父さんはすごい！」と、うれしそうに話す櫻子さん。「UD新聞の続編も作ってみたい。私も、お父さんみたいに周りのみんなにやさしい気持ちを持っていたいと思います」。

UDで大切なことは、周りの人々に目を向けることによって、一人ひとりの存在を認め合い、お互いを思いやる心や助け合う心を持つことです。現在では多くの皆さんによって実践されているUD。このような取り組みを一つひとつ着実に積み重ねていくことで、だれもが暮らしやすい社会が実現していくのです。



熊本市花園小6年 庭木 櫻子さん

「日本マラソンの父」と言われる本県出身の故金栗四三氏(一八九一年～一九八三年)実は彼は今やお正月の風物詩である箱根駅伝を発案し、その礎を築いた駅伝の父でもあるのです。

金栗氏は一八九一年(明治二十四年)玉名郡三加和町で生まれ、東京高等師範学校(現筑波大学)に進学。在学中の一九一一年(明治四十四年)二十歳のとき、オリンピック国内予選で世界新記録を樹立、翌年、日本人初の選手として第五回ストックホルムオリンピックに出場します。ところが慣れない舗装道路と予想外の暑さで日射病にかかり棄権、日本人のレベ

ルがまだまだであることを痛感します。しかし、くじけることなくマラソンランナーとしてさらに自分を鍛え、かつ後進をも育てることを決意。敗因の一つが暑さだったことから、金栗氏が取り入れた練習法は、あえて気候の厳しい真夏や真冬に走るこ

と山などの険しく空気の薄い所を走ることでした。



玉名高校の後輩たちと走る金栗氏(1964年撮影)

くまもと 鬼斗物語

世界に広がる“EKIDEN”の生みの親—金栗四三氏



まさに日本マラソンを“先駆けた”その人生

一九一七年(大正六年)金栗氏は日本初の駅伝である京都から東京への選都五十年を記念した、東海道五十三次駅伝団体中継徒歩競争の企画に参加。自らも出場しアンカーとして優勝テープを切ります。そして金栗氏が抱いたのが、個人競技であるマラソンをチームでやることで個人が持つ力以上のものを発揮できるという考えでした。そこから、関東の学生選手強化を目的に生まれたのが箱根駅伝です。彼はこの駅伝大会を発案後、報知新聞社の主催を取り付け、参加を募るため各大学を回るなど、実現に向けて奔走。第一回大会は一九二〇年(大正九年)に開催され、以来必死にタスキをつなぎ箱根を越える若者たちの姿が毎年感動を呼んでいます。そして、第八十回となる今年の大会から、最も活躍した選手に最優秀選手賞として「金栗四三杯」が授与されることとなりました。



下関東京間長距離マラソン走破の時に着用したユニフォームと、自ら開発した底にゴムを張った「金栗足袋」

一九五三年(昭和二十八年)には日本が初参加したボストン国際マラソンで監督として四人の選手を率い、優勝を含め全員が八位以内に入賞する快挙を達成。同年、熊本で開催された金栗賞朝日マラソンは、場所を移し、今や福岡国際マラソンとして有名です。生涯で走った距離は二十五万キロ。走りながら書いた「長距離の種は、確実に多くの実を結んだのです」。

参考文献／浜野卓也著「マラソンの父 金栗四三 走ったとどろき 地球 二十五万キロ」玉名市立歴史博物館「こころ」発行
写真／玉名市立歴史博物館所蔵